平和の大切さ

～戦争体験を聞く～

新型コロナウイルスの収束が、なかなか見通せない中、戦争を体験をされた方に今年もお話を伺うことができました。多くの貴重な話を聞き、改めて命の尊さ、平和の大切さ、ありがたさを実感します。

（担当／新井紀子、三塚好江、加藤和代　市川永樹　新井博海）

谷澤寛二さん

・昭和7年生まれ（88歳）
・終戦を迎えた場所　富士見市下南畑

当時、南畑小学校は接収されていて兵隊が１００人位いました。子どもたちは、晴れの日は、家の手伝いをしていました。ほかにも近所の子どもたちが集まり、兵隊に行っている家に行き、草取りの手伝いをしたりしていました。雨の日は、お寺や神社に集まり、勉強をしていました。遊ぶことは、ほとんどなく、せいぜい鬼ごっこをするくらいでした。

勉強していても、空襲警報が発令されると急いで自宅へ帰ります。帰る途中に、新長や中丸あたりの子が、今の立教グランド近くでＰ51（戦闘爆撃機）の襲撃を受けたという話を聞いたこともあります。Ｐ51は千葉県の九十九里の方から、こちらに向かって飛んできていたのだと思います。荒川の土手すれすれに飛んでくるので見えなくて、わからないんです。

南畑は、太平洋側から所沢や入間の豊岡飛行場に向かっていく飛行機の通り道だったみたいです。艦載機が30機位、編隊になって飛んでくるのも見たことがあります。昔は、どこの家にも防風林として竹藪があり、帰り道に急いで竹藪に身を隠したり、近くの家に駆けこんで隠れたりしました。家には、家族で掘った防空壕もありました。

東京の空襲は、ここからでも、Ｂ29が焼夷弾を落としているのが見えました。

食べるものは農家でも供出、供出で厳しかったです。二毛作で麦も作りました。戦後も食糧難でした。

鶴瀬から下田にかけて落ちた爆弾は、10ｍから15ｍ位の間隔で土の山が出来ていました。爆撃で地中の土が盛り上がり、山になってしまったようです。

庶民が犠牲になった戦争は、絶対やるべきではないです。今の裕福な生活は、平和があるからこそです。

加藤栄三さん

・昭和9年生まれ（86歳）
・終戦を迎えた場所　栃木県足利市

私は、栃木県足利市で四人兄弟の三男として育ちました。当時は予科練を受けないと非国民と呼ばれるような時代でした。一番上の兄は予科練に合格しましたが、入隊日が、ちょうど終戦の日で、家族が戦争に行くことはありませんでした。

足利は、隣接する群馬県太田市にある中島飛行場へ行くＢ29爆撃機の通り道で防空壕から抜け出して空を眺めては怒られていました。

近所の同級生は女の子で、小学校の入学式に手をつないで行くと、先生に、男と女が手をつなぐとは何事か！とビンタをくらいました。軍国色が強かった時代です。

小学校には憲兵隊が15人位詰めていました。校庭の隅には長さ１ｍ位ある５００キロ爆弾の不発弾が積んであり、いつ爆発してもおかしくないものが学校にあるんですから今、考えるとゾッとします。

母の実家が、館林の農家で、うちは、まだ食べられた方だと思います。学校には、弁当を持って来られない子や、ひょろひょろのさつまいも１本だけを弁当箱に入れてくる子もいました。

近所のお寺には、東京から、先生の付き添いもなく、子ども達だけで疎開してきている子たちもいました。

ある時、パラシュートで落ちて来た米兵が警察に連行されるのを見たことがあります。道端の見物人が、石を投げつけたり、顔をたたいたりして、子ども心に怖かったです。

忘れもしないのは、ある日、アメリカとイギリスの国旗が校門の前に敷いてありました。新品の布は貴重だったので、つい、よけて入ると、敵国の国旗だから踏みつけろ。なんで、よけたんだ！と、ビンタです。当時、アメリカは赤鬼で、角が２本。イギリスは青鬼で角が１本あると学校で教えられていました。

戦後、アメリカの駐留軍が視察に来た時は、アメリカ兵には本当に角が生えているのか知りたくて、ついて回りました。私は学校で教えられてから、ずっとアメリカ兵には角があると信じていましたからね。

本当に教育って大変な事なんだと、つくづく思います。

深野まつさん

・昭和10年生まれ（86歳）
・終戦を迎えた場所　志木市宗岡

私は、志木の宗岡で生まれ育ちました。忘れもしないのは終戦の年、10歳の私は、毎日、お腹が痛くてもずっと我慢していました。当時は、よほどのことがないと医者にかかることなんて出来ない時代です。女医さんに診てもらうと、盲腸と診断され、すぐにでも手術が必要になりましたが、その先生は手術できない医者で、他の病院から医者を呼んで手術をすることになりました。しかし、手術当日、空襲警報が発令され、来られなくなってしまったのです。手術をしないと、命にかかわるような状況でしたので、今度は手術経験のない高齢の医者が手術をすることになり心配していると警報が解除され、手術のできる先生が、リヤカーで駆けつけてくれました。病院ではヤギを飼っていて、入院中は看護婦さんがヤギの乳を搾って飲ませてくれました。

学校には、学童疎開の子どもが１クラスに７、８人いました。多かったですね。ほとんどの子が親戚を頼って疎開してきたようでした。東京の子は、ハイカラな洋服を着ていたのを覚えています。疎開の子とは、あまり話すこともなかったですね。もっと仲良くできればよかったと心残りです。みんな、半年位いました。

宗岡からも東京の空が赤く、Ｂ29から焼夷弾が落ちていくのが見えました。新聞も来ないし、情報がなくて何もわからず、怖かったです。

春先に、宗岡の土手で、のびるを摘んでいると黒塗りの車が止まり、背広の紳士が降りてきました。のびるを譲ってくれと言われたので渡すと、お金をくれました。今の金額にすると２００円位だったと思います。どんなに立派な身なりをしていても食べるものがないのかな？と思いました。

戦後、小６の時に修学旅行に行きました。６年生は１クラスで20人位です。大体の子は行かれたと思います。担任の先生が連れて行ってくれました。次の年から学校行事になったようです。朝早く、みんなで志木駅に集合して、江の島、鎌倉に日帰りで行きました。写真もないけれど、鎌倉の大仏様や、江の島に渡る橋の光景が、今でも忘れられない思い出です。